

歌人としての和田博士

岡本彦一

和田氏の学問の事については語る人は多いであろうが、私はこの事について語る資格はない。ここには氏と短歌創作との事について語りたい。

氏が短歌をやりはじめたのは、京都市役所水道課に勤務中のことである。その頃市役所内に平安短歌会というのがあり、氏はこれに参加した。丁度その頃、小泉荃三先生が立命館大学に赴任された。昭和七年の事である。その時私は立命館大学専門部三年生であった。この平安短歌会が、小泉先生の話の間こうということになり、和田氏と小泉先生との関係がここから始まった。つまり小泉先生を通して氏と私の縁もここから始まったのである。折しも小泉先生は先生の主宰される短歌誌『ポトナム』昭和八年一月号に「短歌の方向」と題して、「現実的新抒情主義の提唱」という副題をもった論を発表された。以後この現実的新抒情主義は長くポトナムの指導理念となり、われわれはこの方向、現実感の抒情、さらに言えば、当時の社会的現実のあり方を批判する方向の作品を抒情的に表現しようとしたのであった。ここでは氏の歌集の「あとがき」などにより、氏がみづからの作風を述べているところを引用して、氏自身に語ってもらうかたじけなくしたい。

和田氏の第一歌集『微粒』は昭和三十一年七月刊、昭和二十三年から二十九年までの作が収められている。

氏が『ポトナム』に作品を始めて発表した昭和八年から二十二年までの作については『微粒』に「『微粒』以前」と題してその大要をまとめている。この解説に解説を加えるのは、屋上屋を架することであるから不向き、国崎望久太郎、山元一郎、それに岡本、和田が議論したことにつき、「このグループを我々の間で聖護院頼廃派と稱していた」と書いているのを記しておこう。

『微粒』については、その「後記」に「私のうちなる微粒は、憎悪や怒りにうちふるえてきた。そしてまた怖れにおののいてきた。私の微粒は短歌的結晶にあたって、いびつな、あやしい光を放つばかりであった。昭和二十九年は、そのおののきの頂点にあたっていた。」と述べている。

第二歌集『雪眼』は昭和三十九年二月刊、昭和三十年より三十八年までの作が収められている。国崎望久太郎氏の「雪眼解説」に次の如くある。「かれの詩的観念は素朴な感動主義ではなく知的な構成主義である。イメージの溢れるような湧出の中に生成されるものではなく、形象を知的に処理して、その上に詩的世界を

構築しようとするところにある。」と、『雪眼』の難解さに対するひとつの回答であった。

第三歌集『環象』は、昭和四十八年十月刊。昭和三十九年より四十七年までの作が収められている。「現実への対応のしかたとしては、別に『雪眼』の時期と変わった自覚はない。またそれに伴って、短歌制作の方法にもさしたる変化はないように思う。」と作者は「あとがき」に述べている。

第四歌集『揺曳』は昭和四十八年より五十五年までの作が収められている。この歌集については私の見たことを記す。作者は現実に傍観の姿勢で対する。現実に対して得たものを内面化させる。現実に対して鬱屈したものが内面的な怒りとなる。

第五歌集『暁闇』〔現代短歌全集3〕短歌新聞社刊は昭和五十六年より六十年までの作が収められている。「あとがき」に「歌の方は、『揺曳』とさしたる変化はないのではないかと思う。この年で何か新しいものをというのは無理だろう。」とある。

第六歌集『往還』は昭和六十一年より平成元年までの作が収められている。「あとがき」に「作風は、おおむね『暁闇』の延長上にあると言つてよいだろう。もし変つたところがあるとすれば、淡泊になつたことと、ある種の軽みが増したところくらいであろうか。この二月二十六日（平成二年）で満七十七になつた。いわゆる喜寿である。これを記念しての出版でもある。」とある。

第七歌集『春雷』は平成二年より四年までの作が収められている。「あとがき」に「私の歌風については今更喋々しない。小泉

先生提唱の「現実的新抒情主義」の真髄に即した「現実象徴」を念願としているというに止めよう。」とある。

第八歌集『越冬』は平成五年より七年までの作が収められている。「あとがき」に「作歌をはじめてからまもなく、昭和十一年、当時の思想・言論の弾圧に対処する方法として身に付けた象徴的手法は、基本においては今もあまり変わっていないことを確かめ得た。今は、その（現実）は変わっており、また批判・抵抗の対象も広く社会の風俗の諸般にわたっている。言うまでもないが、自己への凝視・批判も多い。また象徴のスタイルにも変化があることは確かであるが、同じ道をとぼとぼと歩いているという印象は消しがたい。」とある。

（おかもと・ひこいち 元立命館大学非常勤講師）